

英語ディベートを取り入れたトピックベース学習による 高3入試演習クラスに関する報告

Topic-based instruction with English debate in an English class for Japanese high school seniors

須能 麻衣花

早稲田大学大学院 教育学研究科

Abstract

This paper describes an English class for Japanese high school seniors that I taught in 2015, in which students learn English, especially focusing on reading, to prepare for university entrance examinations. In the class, I made use of topic-based instruction, which allows the students to improve their English skills while studying particular topics they are interested in. In addition to it, I introduced English debate into the class so that the students could develop not only English reading comprehension but also communicative ability and could work actively. In every class, the students read English text concerning a specific topic, and then debated on it. This paper reports details about procedure of the class and some examples of the topics and points of arguments which we dealt with, and also summarizes some advantages which this method has.

キーワード: トピックベース (topic-based instruction), コミュニカティブアプローチ (Communicative language teaching), 英語ディベート, 英文読解, 動機づけ, 大学入試対策

科目名	入試演習英語 (理系)
対象者とクラス人数	高校3年生 18名
学習の目標	各々の志望大学の入試に備えて、難度の高い英文に多く触れ、理系の背景知識を身に着けつつ英語の語彙・文法を強化しながら、大学入試レベルの英文読解力・論理的思考力を培う。

1. はじめに

本稿では、2015 年度に報告者が非常勤講師を務めた私立高校の 3 年生（理系大学進学希望者）を対象とした入試演習のクラスにおいて、トピックベースの授業を行い、そこに生徒による英語ディベートを取り入れることによって、受験対策の授業とアクティブでコミュニケーション的な授業の両立を目指した試みについて紹介する。

まず本題に入る前に、このような授業が実現した前提として以下の 5 点を述べたい。

1. 理系大学志望者が選択科目として受講する小規模クラス(18名)であったこと。
2. 授業を受講するためには成績の条件が設けられており、英語の成績が比較的上位の生徒が集まっていたということ。
3. 45分×2コマの連続の授業であったということ。
4. 指定された教材やシラバスなどは一切なく、授業の全てが報告者である私に任されていたということ。
5. 入試演習クラスなので、入試（英語学習）に対するモチベーションが少なからず生徒全員にあったということ。

勿論、上記の前提がなかったとしても、今回報告するトピックベースでの授業や英語ディベートは幅広く活用出来ると考えているが、今回の授業実践は以上のような恵まれた環境があって成り立っていた側面が否めないため、前提として考慮に入れる必要がある。

また、当授業は 4 月から 12 月まで前期・後期を通して行われたが、時期に応じて授業内容は変化しており、本稿ではその中でも特に有効的であった 5 月後半～9 月におけるトピックベースの授業について述べたい。大まかな一年間の流れとしては以下の通りである。

表 1. 本授業の一年間の流れ

時期	授業内容	目的
4 月～5 月前半	・英文精読(毎週 1 トピック) ・英文で扱った単語について 毎週の単語テスト	時間をかけて英文精読をし、授業で扱っていくレベルの英文に慣れる。自分の考えを持ちながら読解する練習をする。
5 月後半～9 月 ※本稿主要部分	・英文読解(毎週 1 トピック) ・↑に基づく英語ディベート ・毎週の単語テスト ・補助問題（読解・記述）	トピックについて深く理解し自分の考えを持ち、その考えを短時間でまとめて英語で表現する。また、読解とディベートを通して論理的思考力を伸ばす。

10月～12月	・志望校の過去問題対策 （受講者全員の志望校の過去問題を毎週1～2校ペースで対策）	実際の入試問題形式や難度に慣れる。 9月までの授業で培った読解ストラテジー・論理的思考・自分の考えの表現の仕方などを応用していく。
---------	--	--

2. トピックベースでの授業

2.1 トピックベースとは

トピックベース（topic-based instruction または theme-based instruction）の特徴や提唱されている長所を簡潔にまとめると、以下の通りである。（Luoviksdottir, H. J., 2011）

<特徴>

1. 学習に使う教材や授業での活動は、特定のトピックやテーマに基づいている。
2. 主な学習目標は、学習者が学習言語で特定のトピックについて学ぶことによって、言語能力を習得することである。
3. 単に言語形式を教えるのではなく、トピックの分野・内容を重視して教える。

<長所>

1. 学習する言語にも焦点は合わせるが、重視されるのは授業の内容であり、そのことによって生徒の様々な興味・関心に答えることが出来る。
2. 実践的で意味を重視した教え方であるため、効果的な言語学習を促す。
3. 意味・内容に重きを置いた学習をすることで、学習者の内発的動機付けを高める。
4. 学習言語の自動化に重きを置くため、過度な言語形式・文法の学習よりも学習者のコミュニケーション能力を伸ばすのに役立つ。
5. 現実社会の問題を授業で取り扱うことが可能であり、学習者はオーセンティックな問題に基づいて言語能力を伸ばすことが出来る。
6. コミュニケーションを通して学ぶことによって4技能を統合することが出来る。

勿論上記の全てが達成できるかどうかは条件によるが、私は今回の授業において主に以下の5点を目指しており、これらの目標は上記のトピックベースの特徴・長所によってカバーされるところが大きいと考えたため、今回の実践に至った。

- (1) 英文読解をベースに置きつつ生徒主体の授業にすること。
- (2) 様々な理系分野の背景知識や専門用語を含む英文に多く触れること。
- (3) 生徒のモチベーションを上げること。

- (4) 国立二次試験のような考えの表現が問われる入試にも対応できる力を伸ばすこと。
 (5) 生徒の理系分野に対する（英語での）見解や論理的思考を促すこと。

2.2 テキスト

トピックベースの授業をするためには、特定のトピックに基づき英語を学べる教材を選ぶことが重要である。今回の授業においては、大学入試レベルの難度の英文で、且つ様々なトピックを取り扱う必要があったため、中澤（2006）による『話題別英単語 リンガメタリカ（改訂版）』を主要教材として採用した。この参考書では、難関大入試の英文（和訳付き）を通して様々なトピックに触れ、重要な背景知識や単語についても学ぶことが出来る。それぞれの英文は大きく11の分野に分かれており、その中でより細かく計116のトピックを取り扱っている。各トピックについて英文が載せられているだけでなく、日本語と英語によって背景知識の解説が細くなされているため、学習者は単に和訳を学ぶのではなく、各トピックそのものについて専門用語等を含めて学ぶことが出来る。今回の授業では主に理系トピックを取り扱ったが、他分野においても入試頻出トピックに関しては取り扱った。実際に授業で取り扱ったものとして以下のようなトピックが挙げられる。

グローバル化の功罪、アダム・スミスの理論、学校・職場でのいじめ、少年犯罪、地球温暖化、廃棄物ゼロシステム、人口知能、クローニング、安楽死・尊厳死、遺伝子工学の人間への応用、遺伝子組み換え食品、脳死、末期医療、言語の習得、神経科学、脳科学、心理学、インターネット、女性解放運動、死刑、哲学 他

これらに関して、基本的には週に1つというペースでそのトピックについて論じている英文を読解し、解説を通して背景知識に関しても学び、その後トピックに基づいてディベートを行うという流れで授業を行っていた。

3. 英語ディベート

トピックベースは、学習言語の形や文法事項よりもトピックの内容に重きを置いた教授法であって、その中でどのような活動をするか特別な決まりがあるわけではない。そのうえで今回は、生徒全員が参加でき、トピックに関する深い理解と見解を促し、コミュニケーションで、且つ論理的思考力が伸ばせる活動として、アクティブ・ラーニングなどでも使われている英語ディベートを採用した。

3.1 英語ディベートのルールと流れ

今回のディベートでは、全員が確実に参加すること・限られた時間内に1試合が終わる

英語ディベートを取り入れたトピックベース学習による高3入試演習クラスに関する報告

よう簡易化することの二点を重視し、独自のルールを以下の通り設けた。

1. 三人一組で行い、一人が肯定派、一人が否定派、一人がジャッジを務める。
2. それぞれの役割は毎週交替していく。(例：生徒 A 肯定・生徒 B 否定・生徒 C ジャッジ ⇒ 翌週は生徒 A ジャッジ・生徒 B 肯定・生徒 C 否定)
3. 毎回の論題は教師が提示し、全グループ同じ論題の下で試合をする。

ディベートに至るまで・ディベート中の大まかな流れは以下の通りである。ただし、毎回タイムテーブルは厳密には定めず、随時クラスの様子を見て調整していた。なお、ディベート内で生徒が主張・発表する際の言語は全て英語である。

表2. ディベートの流れ

時間	肯定派生徒の動き	否定派生徒の動き	ジャッジ生徒の動き
20～40分	英文読解・トピック理解		
1,2分	論題理解・各ディベートグループ(三人一組)に分かれる		
5～10分 (随時調整)	肯定派の主張文(主張・根拠・結論)を考え、原稿・メモを作る	否定派の主張文(主張・根拠・結論)を考え、原稿・メモを作る	トピックで重要な論点を考え、両派に聞くべき質問を予め用意する
3分	主張	主張を聞きメモを取る	主張を聞きメモを取る
3分	主張を聞きメモを取る	主張	主張を聞きメモを取る
5分	ジャッジの質問に回答	ジャッジの質問に回答	時間内で肯定派・否定派それぞれに質問をする
5～8分 (随時調整)	あれば否定派に反論・質問をする／否定派からの反論・質問に答える	あれば肯定派に反論・質問をする／肯定派からの反論・質問に答える	やり取りを聞きメモを取る／途中で疑問が浮かんだら随時尋ねる
2,3分	待機	待機	勝者と根拠を決める
5～10分 (随時調整)	試合結果を聞き必要に応じてメモを取る	試合結果を聞き必要に応じてメモを取る	一人ずつ、各班の勝者とその根拠となった論点を全員の前で発表する

以上のように、一般的なディベートとは異なる簡易型ディベートにすることによって、授業内の限られた時間でも1試合を終えることが出来た。ただし上の時間配分はあくまで生徒が余裕を持って行える時間の目安であるため、より短時間の場合でも準備時間や質問

タイムを調整すれば試合を行うことは可能だと思われる。また、実際のディベートの試合ではグループ対グループで試合をし、ジャッジは学生以外が務めることが多いが、このディベートは三人一組で行うという点が最大の特徴である。メリットとして、一人ひとりに重要な役割を与えることで全員が確実に参加するようになることが挙げられる。実際に、グループワークでは消極的で発言をしない生徒でも、今回のディベートでは十分に発言していた。また、もう一つの特徴として、後半の反論タイムを厳密に役割で区切らず、両派及びジャッジが必要に応じて質問・反論・応答できる自由な時間として設けてあることが挙げられる。つまり、この時間は一対一のディベートというよりも三人全員でのディスカッションとなっており、生徒の参加が最も活発な時間であった。このディスカッションでは、それまでのディベートによって議論の土台が出来ているため、話し合うべき論点が各班で明確になっていたように思われる。最終的には三人全員が自由に発言し、各班の中で一番熱い論点について本人たちが本当に気になった点を話す貴重な時間であったため、この時間を設けたことは生徒のコミュニケーション促進において有効であったと考えられる。

3.2 英語ディベートの論題

次に、それぞれのトピックについて、実際に生徒がディベートをした論題をいくつか紹介したい。これらの論題は毎回教師である私が決めていたが、論題を決める際には、読解する英文内でも論点として提示されており、かつ賛否が分かれやすいものを選んでいった。トピックとそれに基づく論題の例は以下の通りである。

表 3. 実際にディベートで使用したトピック例と論題例

トピック例	論題例
地球温暖化	“We should give priority to a solution to global warming over development of the civilization.”
安楽死	“The Japanese government should legalize euthanasia.”
脳死	“The Japanese government should define ‘brain death’ as ‘death’ to increase the number of organ donations.”
クローニング	“We should clone humans that have superior genes to others.”
死刑	“The Japanese government should abolish the death penalty.”

上記のように論題は難しく、生徒が日常生活では考えたことのない内容がほとんどであったが、事前にそのトピックに関して英文を通して学んでいるため、議論をするのに必要

な表現などは英文から借りることができる。はじめに英文読解をして、背景知識や用語を学んでからディベートに移るという順序が重要であると言える。また、議論が停滞した際には、教師が補足の背景知識を伝えるなどして議論を活性化させていた。例えば、上の「脳死」に関して、大半の生徒が論題に賛成意見しか思いつかず、否定派が困窮していた際に（英文の内容が臓器移植の少なさを指摘する内容であったため）、私が “In fact, brain-dead people’s nails grow like yours.” や “Many parents whose children are brain-dead believe that their children are alive.” のような情報を加えると、生徒たちは脳死という問題に関してより生々しく思い描くことができ、議論が活性化した。その他にも生徒からトピックに関する質問が多々くるため、当然のことながら、教師もトピック・論題に関して知識を持って臨まなければならないと言える。

3.3 英語ディベートの議論内容

では実際に生徒がどのような論点について議論をしていたのか、参考までに具体例をいくつか紹介したい。なお、ディベート中は基本的に教師は介入しないが、常に机間巡視をして生徒の議論内容を把握し、必要に応じて議論のヒントとなる情報を与えていた。また、最後にジャッジによる各班の論点発表があるため、生徒も他の生徒がどのような議論をしたのか共有することができていた。

表4. 生徒による論点の例

トピック：安楽死 (Euthanasia)	
論題：“The Japanese government should legalize euthanasia.”	
肯定派 (Affirmative)	否定派 (Negative)
<ul style="list-style-type: none"> ➤ Quality of life is more important than life itself. ➤ Euthanasia can help the patients who are suffering from pain. ➤ We should have choice of our own death. ➤ Euthanasia is better than suicide. 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ Life is important. ➤ It is difficult to judge whether euthanasia is murder or not. ➤ If my family or friends should desire euthanasia, I would be sad very much. ➤ We should try to treat the patients.

勿論、第一回目から上のような論点が出せていたわけではなく、英文読解の度にそのトピックについて背景や用語をより詳しく学んだり、世間でなされている議論を含む様々な情報を聞いたりしながら、トピックについて自分の考えを持ち表現する練習をしていくこ

とによって、徐々に議論の力も上達していったのである。

4. おわりに

ここまで英語ディベートを取り入れたトピックベースの授業実践について報告してきたが、先に述べたように、今回はこのような授業をする環境が整っていたという前提があり、同様の授業を実践できる場合は限られてしまうかもしれない。また、教材や授業の流れ、ディベートのルール等は、何かを参考にしたのではなく私が生徒の様子を見ながら作り上げていったものであるため、多くの改善点があるものと思われる。しかし、今回の実践を通して感じた利点もあり、今後もそれらを伸ばしながら授業を改善していきたいと考えているため、最後にその利点についてまとめたい。

1. 生徒が主体となって学ぶことができる点

ディベートにおいては生徒全員が参加し、コミュニケーションを取りながら進められていた。また、生徒の興味に応じて教師が情報を伝えたり、生徒が興味のある分野・トピックを題材にしたりするなど授業の中心が生徒であった。更に、英文読解パートにおいても、後のディベートに繋がるため生徒はとても集中して取り組み、自ら進んで単語勉強などもしていた。

2. 生徒の動機付けに役立つ点

上記のように扱うトピックは生徒が興味のある分野が多く、特に理系分野の場合はより身近な問題として取り組むことが出来たため、英語が嫌いだと言っていた生徒も内容そのものに興味を持って読解やディベートに積極的に参加していた。また、分かり切った内容ではなく少し難しいことを議論することによって退屈を防ぎ、モチベーションの向上・維持に繋がっていたように思う。更に、ディベート中に「言いたいことが伝わらず本当に悔しい」という思いをした生徒も少なくないようで、この「悔しさの経験」というものが非常に大きな力を持っていると感じた。ディベートの後には、休み時間にも関わらず生徒同士が引き続きトピック・英文について議論をしていたり、辞書をひいて表現を自習していたりと自律的な学習が目立った。

3. 受験対策と両立できる点

前述したように、この授業はあくまで入試演習であり、後期にはディベートではなく実際に志望校の過去問題を解いたのだが、前期から既にくつも難度の高い英文を読解し、それらを通して様々な知識や単語も得ていたため、入試問題を解く段階には大きな困難なく移行できていた。また、自分の考えを述べる記述問題にはディ

べートでの経験を活かすなど、生徒はそれまでの授業で学んだことを応用できていたように思える。実際に、毎回の定期試験においても読解問題と記述問題を出題していたが、初見の問題においても平均点は確かに上がっていた。勿論それはこの授業だけの成果ではないだろうが、重要なことは、コミュニケーション活動をメインに置いたとしても、その難度を上げたり英文読解と組み合わせたり、あるいは活動を通して動機付けや自律的な学習を促したりすれば、決して受験英語の勉強の邪魔にはならないということである。私は受験英語も、コミュニケーションな英語も、どちらも大切だと思っているし、実際に日本の中学生や高校生にとってどちらも大切であるということは現時点では間違いないと思われる。どちらかを選ぶのではなく、どちらも両立して、そして志望校に合格してほしい。そのためにはコミュニケーションで、日本の受験にも対応する英語力を伸ばし、且つ生徒のモチベーションを高めるような授業が求められる。そこにおいて、今回は「トピックベース」・「英語ディベート」という二つの方法が有効であったということをここに報告し、今後も改良を重ねていきたい。

参考文献

Luoviksdottir, H. J. (2011). Topic-based instruction in the EFL classroom: topic-based lesson ideas for teaching students at the lower secondary level. Retrieved from <http://skemman.is/en/item/view/1946/9571;jsessionid=B8D2BBE879AF93E37C0D49861E7E7CB5>

中澤幸夫 (2006) 『話題別英単語 リンガメタリカ (改訂版)』Z会出版